

大きな「夢」にチャレンジしてこそ、 エンターテインメント・ビジネスです。

「韓流」ブームをきっかけに、その後も数多くの韓国の映画、テレビドラマ、音楽などが、日本に紹介されるようになって久しい。李子黙代表理事(社長)は韓国と日本、両国のエンターテインメントを紹介するビジネスに携わっており、さらに大きな「夢」を目指している。

厳しい留学体験があったから、 いまの自分がある。

専修大学に留学して何を学んだか、ひとことで言うのは難しいですね。むしろ、生活が非常に厳しい中、アルバイトをしながら勉強し、卒業した……。自分との戦いの中でやり遂げたということが、いまの自分の自信になっていると思います。

1991年に卒業して、日本のエンターテインメント企業のポニーキャニオンに就職しました。1996年、ポニーキャニオンが韓国に設立した合弁企業に転勤となり、韓国に戻ってきました。ところが、97年にアジア通貨危機が起こりました。韓国もIMF(国際通貨基金)の支援を受けたため経済環境は非常に厳しくなり、その会社は経営が悪化して清算することになりました。当時、私は平社員でしたが本社に、「もう1回、チャンスをください!」と掛け合いました。当時、韓国は経済的に非常に厳しい状況にありましたが、「これからは国民所得が1万ドルを超え、『遊び』や『文化』についても関心が高まるだろう、エンターテインメント事業は成長していくだろう」と予測したのです。最終的に、その会社は清算し、新たにポニーキャニオン코리아としてゼロから再スタートすることにな

りました。

最初は厳しい経営状態が続きました。韓国では、1998年まで日本の文化は禁止されていたので、アニメなどのコンテンツを販売することができませんでした。そこで、すき間的な分野を狙い、ドラマのサウンドトラックを手がけました。2002年頃からアジアで「韓流」ブームが起き、日本でも『冬のソナタ』に代表されるドラマなどが大人気となりました。当社でもサウンドトラックをはじめ関連するコンテンツを、どんどん集めて日本の本社に送ったり、またロイヤリティ収入が当社の収益につながりました。その頃から当社の韓国現地法人としての役割が、確立されたように思います。

成功・失敗の経験、 ノウハウを生かし次の飛躍へ。

韓国はいま、急速に変化しています。人気のサイクルも早く、この業界で生き残っている会社は数少ないですね。当社が生き残ったのは本社の先見力があり、いち早く韓国で現地法人を設立するという、当社独自のビジネスモデルがあったからだと思います。今は本社のアシスタント的な役割が中心ですが、当社独自のドラマの制作、アーティストやタレントの育成などを通じて、「ポニーキャニオン코리아」のブラン

李子黙

ポニーキャニオン코리아
株式会社 代表理事

イ ジャムク●1991(平成3)年、経営学部情報管理学科卒業。1960年生まれ。韓国全南康津郡出身。卒業後、日本のエンターテインメント企業のポニーキャニオン株に就職。国際部、開発部に勤務後、ポニーキャニオン코리아株の設立に参画。現在、スタッフは12人。売上は60億ウォン。



ドを確立したいと思っています。

もう一つは、日本の素晴らしいコンテンツを韓国でヒットさせたり、タレントさんを紹介したいと考えています。韓国では日本の漫画を原作にしたテレビドラマ、たとえば『花より男子』がヒットしたので、そうした分野も手がけてみたいですね。

いままで成功もありますが、失敗もあり、そうしたことを積み重ねてきたことで、ヒットする、しないが、ある程度、分かるようになってきました。専修大学での留学経験、日本の会社での勤務経験は、現在の仕事に役立っています。

最近では、韓国と日本の交流がエンターテインメント業界、観光、ITなど、さまざまな分野で盛んになっており、目の前に素晴らしいチャンスが転がっていると思います。今年から来年にかけて、大きなプロジェクトをやりたいと仕掛けている段階で、ビジネスには「夢」が欠かせないと思います。「夢」がないと、私も社員も全力を尽くす気持ちにならないですね。(談)